

P. B. Shelley の *Laon and Cythna* における ナイル川の比喩

池 田 景 子

序

Shelley の *Laon and Cythna* は、仏革命の挫折をモデルに革命の失敗と理想の革命とは何かを読者に問いかける物語である。主人公 Laon は Cythna とともに子ども時代を過ごす、Cythna は暴君の手下によって誘拐され、二人は引き裂かれる。二人はそれぞれの道で奮闘を経て、革命に関わるが、失敗する。Laon は幻滅を覚えるが、Cythna と再会して愛の獲得に至り、人類愛を認知する。二人はともに忍耐を学んで精神的成長を遂げ、革命に殉死する。ふたりの思想は不滅のものとなり、千年王国樹立の理念が後世に伝えられる。本作品の目的は革命の成功例を示すことではない。むしろ、革命家であり詩人でもある Laon の生き様を一種の「記念碑 (a monument)」として提示することで Shelley は仏革命における挫折要因を社会に知らしめて、愛の重要性を強調しようと試みる (Dawson 73)。このような Shelley の試みを鑑みると、Laon と Cythna の愛の物語の中で Laon が Cythna と再会して愛を取り戻す場面は重要である。¹興味深いことに、Laon と Cythna の結婚 (愛の成就) はナイルの洪水に比されている。本論考ではまず、Laon と Cythna の再会と結婚の場面において、愛のモチーフがナイルの洪水として描かれていることを確認したい。次に、このナイルの洪水の比喩には、Laon が愛を獲得するには毒を経験しなければならないというシェリーのメッセージが込められていることを考察する。

さらに、Laon が経験する毒とは Cythna の子どもと狂気の母 Pestilence との関係であり、彼らは、Laon の詩的インスピレーションを復活させるガイド役を果たしている点で重要な役割を担っていることを立証したい。作品分析に入る前に本論考では、扱う作品内容が込み入っているため、物語の粗筋を紹介していく。この点で通常の研究論文の用式とは異なることを申し添えておきたい。

1. *Laon and Cythna* の粗筋

ある岬で語り手（詩人）は、ヘビとワシが空中で絡み合って闘っている姿を目撃する。やがてヘビとワシは海へ墜落し、ワシは飛び去る。そこへ美しい女性がやってきて、海から出てきた蛇を胸に抱く。この女性に誘われて語り手は舟に乗り、不滅の領域に存在する御殿（Temple）へ向かう。御殿の中で女性が蛇の名を呼ぶと、その場に崩れ消えてしまうと同時に、2つの光が生じて人の姿となる。男性の姿をした精霊（Laon）のそばには女性（Cythna）の姿をした精霊が寄り添う。この男性の姿をした精霊が語り手に、自らの身の上話を始める。

Laon の少年時代、故郷の島は暴君の支配のため退廃し、人々は希望を失っていた。そんな世の情勢を Laon は耳にし、幼くして自らの使命を自負していた。いつの日か立ち上がり、民衆を覚醒しよう、と。幼い頃の Laon は一度友に裏切られ絶望するが、妹（改訂版では孤児）Cythna によってその絶望を癒し、真の共感を通わす。だが、Laon は思春期を迎えると、Cythna への愛が苦痛になっていく。そんなある日、オスマンの暴君に仕える手下がやって来て Cythna をさらう。Laon は手下のうち3人を殺害するが、岩に縛り付けられ、生死の境をさまよう。4日後、老人の隠遁者（Old Hermit）が人々を説き伏せて、Laon の鎖を解く。老人は Laon を自分の小屋に連れて行き介抱する。

やがて Laon がこの隠遁者の世話になって7年が経つ。隠遁者は革命に対する情熱を持っているが、高齢であるため若い Laon の力を借りたいと頼む。折

りしも、ある若い女性が暴君から逃れて立ち上がり、Golden City（コンスタンティノーブルがモデル）で人々を誘導していた。Laon は隠遁者の申し出を快諾し、町に向かう。町では人々は暴君の館を取り囲み、革命は成功する。このとき、Laon は人々を誘導していた女性の名前を知る。彼女の名は Laone といい、恋人から取った名前だったのである。Laon が暴君の館の中に入っていると、暴君と幼い女の子がいる。Laon はなぜかこの子どもに親近感を覚える。群衆は暴君への厳しい処罰を望むが、Laon は非暴力を強調し、暴君に町を去らせるにとどめる。人々は革命の成功を祝おうと祭りを開くが、夜明け頃に異変が起きる。海外から軍隊がやって来て、暴君が復活する。人々は逃げ出し、Laon と数少ない仲間も退却を余儀なくされる。日暮れ近くになり、とうとう生き残ったのは Laon 一人になる。そこへ馬に乗った女性がやってきて、Laon は言われるがまま女性の馬に飛び乗る。この女性が Laone であり、Cythna だった。ふたりは再会を喜び、結ばれる。Cythna が空腹であるため、Laon は食べ物を探しに行く。このとき Laon は子どもを失った狂気の母 Pestilence と遭遇する。

再び Laon が Cythna のもとに食べ物を携えて戻ってくると、Cythna はこれまでの経験を話す。暴君の手下にさらわれた Cythna は暴君の宮殿に連れて行かれたのだった。暴君は Cythna をレイプするが、Cythna の誇り高さが暴君の怒りに触れ、海中の洞窟に幽閉される。ここで Cythna は子どもを生む。だが、突如として子どもは姿を消す。Cythna は打ちのめされ、自分に子どもがいたこと自体が夢か現か分からなくなる。だが、Cythna はオウムガイと鶯の様子を見て、天から啓示を受けたように昔の活力を取り戻す。折りよく、地震が発生し、洞窟から脱出が可能となる。そこへ船が通りかかり、Cythna は水夫たちに助けてもらう。水夫たちのおかげで Cythna は港にたどり着く。この町で Cythna は女性活動家 Laone として女性解放を提唱していたのである。こうして革命が起り、一時成功した後、失敗し、Laon と再会することになる。ここで Cythna は Laon に次のように言う。今は冬の時代だが必ず春がやっ

て来る、と。Laon や Cythna が死んでもその思想は人々に伝えられると、Cythna は強調する。

暴君が復活すると、叛乱に関わった者を一掃し始める。さらに、町を飢饉が襲い、伝染病が広まる。伝染病の恐怖からは暴君さえも逃れることができず、皆災いから逃れようと、様々な神を崇拝し始める。伝染病の猛威を治めるために、イペリアの司祭は人々に提案する。あの Laon と Laone を火あぶりにして神の怒りを解こうではないか、と。そんな中、一人の男が僧侶たちの前に姿を現す。その男は、今夜 Laon を連れてくるので Cythna をアメリカに逃してほしいと言う。この取り決めを交わすと、その男は隠遁者の装束を取り、自分が Laon であると名乗る。Laon は捕らえられ、火あぶりの刑に処されることになる。刑執行の当日、Cythna は Laon と運命をともにするため馬に乗って Laon のもとに駆けつける。暴君のそばには子どもがいて Laon の命乞いをするが、暴君に殺される。次の瞬間、子どもは蘇って天使となり Laon と Cythna とともに舟に乗っている。この天使こそが突如として姿を消した Cythna の子どもである。さらに、天使は自らが Laon の子どもだと Laon に告げる。こうして、3 人はひとつの家族として天上の館へ向かう。

2. 愛がもたらす実りと毒

Laon and Cythna のテーマは愛である。本作品の序文において Shelley は「愛は倫理的世界を治める唯一の法としてどこでも賞賛される。(Love is celebrated everywhere as the sole law which should govern the moral world.)」と、愛の重要性を説く (120)。さらに同じ序文で、本作品は主人公 Laon が理想を求めて人類愛に捧げることで精神的成長を遂げた物語とされている。つまり、Laon と Cythna の物語は、ふたりが自分たちの愛を育み、同時に人類愛へと身を捧げる物語なのである。次に、Laon と Cythna の再会と結婚の場面からふたりの愛の再発見が、精神的再生と人類愛への認知と重ねて描かれている点

を考察したい。

成功したかに見えた革命が挫折し戦乱となる中、Laon は死んだはずの Cythna に再会する。ここで（再）発見された愛は「砂漠における水源の音楽（the sweet source / Of waters in the desert）」に比されている（6. 20. 2512-13）。² 愛は乾燥した砂漠において生命に潤いを与えてくれる水である。つまり、Laon は革命の挫折を経験して精神的ダメージを受けるが、Cythna との再会で愛を再発見して精神的再生を体験するのである。さらに、この水源の比喩は本作品の献辞詩にも見られる。この献辞詩において、話し手は愛を求めて友人の裏切りに遭い失望するが、メアリとの家庭愛によって希望と愛を取り戻し前進することを表明している。Shelley にとって、このような愛は個人的レベルでの家庭愛であると同時に、圧制者をも倒す「真実の不滅なる声（Truth's deathless voice）」すなわち公的レベルでの人類愛へも繋がるものである（14. 118）。この真実の声は砂漠における孤独な旅人が抱く家庭愛の音楽に比されている（“some lone man who in a desert hears / The music of his home” [13. 112-13]）。そうすると、Canto 6 で Laon が発見した愛は、Cythna との家庭愛の再発見ばかりではなく、Laon が挫折した革命への失望から回復して人類愛の認知へと至るシナリオも予兆しているのである。さらに、水が人間に補給する潤いのモチーフは、Laon と Cythna の結婚におけるナイル川の比喩とも結びついている。Laon と Cythna の結婚を描く場面において、愛はナイル川の水源がエジプトにもたらす恩恵として描かれている。

[..] thus we forever

Were linked, for love had nurst us in the haunts

Where knowledge, from its secret source enchants

Young hearts with the fresh music of its springing,

Ere yet its gathered flood feeds human wants,

As the great Nile feeds Egypt [..] (6. 41. 2697-702)

この場面でも愛を知ることは、ナイルの水源が若者を魅了する音楽として描かれ、Laon と Cythna の再会する場面や本作品の献辞詩で確認した水源の音楽の比喩と類似している。同時に、水源の音楽が砂漠にいる人間に水を供給したイメージは、ナイルの比喩において母親が子どもに授乳して育てる (feed / nurse) モチーフに取って代わられる。この場面が子ども時代にふたりが共有した楽園の回復を想起させるのだとすると、ふたりは再び子どもに戻って愛の授乳をうけて、再生したのである。

このように、Laon と Cythna が子供時代に戻って再生するモチーフは本作品において他の箇所にも見られる。まず、Laon の場合を見てみよう。Cythna が暴君の手下に誘拐された時、Laon は手下に暴力で抵抗したため岩に繋がれる。隠遁者に命を救われると同時に、革命への参加を促される。ここで、Laon の人生は革命家として再生するのである。ここで隠遁者が Laon を介抱する姿は、病める母が死にかけの子どもの世話をする様子に喩えられる。

And still that aged man, so grand and mild,
Tended me, even as some sick mother seems
To hang in hope over a dying child,
Till in the azure East darkness again piled. (3. 33. 1401-04)

同様に、Cythna も精神的再生を果たす際に子ども返りをする。暴君に囚われレイブされた Cythna が狂気を発症したため、エチオピア人の奴隷によって海に囲まれた洞窟に幽閉される。この洞窟で Cythna は子どもを生み、精神的回復を果たす。このとき Cythna は母なる自然から愛を教わることになる。遊び疲れて Cythna は子どもとともに並んで大地に横たわるが、大地は母であり Cythna と子どもは「ふたりの幼児 (Both infants)」である (7. 21. 3018)。この場面において Cythna は子どもとともに母なる大地からあやされている (be nursed) とは言えないか。

"Ere night, methought, her waning eyes were grown
 Weary with joy, and tired with our delight,
 We, on the earth, like sistertwins lay down
 On one fair mother's bosom [...]. (7.22.3019-22)

では、なぜ Laon と Cythna は成長する度に子どもに戻るのか。Shelley はエッセイ "On Love" のなかで、愛を「子どもが母の胸から授乳を求める (the infant drains milk from the bosom of its mother)」ようなものと定義する (504)。さらに、Shelley は孤独にある人間は自然から愛を学ぶこともできるとしている。こうして Laon は隠遁者から、Cythna は母なる大地から愛を学んで成長し、ふたりは結婚においてその愛を完成させたのである。つまり、Laon と Cythna は愛を知ること、家庭愛の完成 (結婚) と人類愛の認知 (革命の目標) といった実りを成就させたことになる。

だが、Laon と Cythna の結婚において描かれているナイル川の洪水は実りだけをもたらすわけではない。Shelley はソネット "To the Nile" (1818年) のなかで、人間の知をナイルの洪水として描き、その洪水がもたらされるところには「毒 (poisons)」と「実り (fruits)」の両方が含まれるとしている (12)。ナイルの洪水はエジプトに実りをもたらすと同時に、災害ももたらすことを踏まえて、人間の知もまた文明に大きな実りと害をもたらすことを暗示している。Laon と Cythna が近親相姦的愛を「知ること (knowledge)」もナイルの洪水として描かれているのだとすると、ふたりの愛の達成には実りだけでなく、毒も含まれるはずである (6.41.2699)。では、Laon と Cythna の結びつきにおいて、実りと毒とは何か。まず、ふたりの愛の実りは、共感的愛の完成である。一方で、ふたりの愛は近親相姦であるがゆえに、肉体関係を結べば死を伴う。³ 本作品の序文において、Shelley は Laon と Cythna の近親相姦的愛のモチーフを用いた理由について、「本当に多くの人間悪があるからこそ、ほんの少しの真実味をもった徳が存在する (there is so great a multitude of artificial vices,

that there are so few virtue.)」と述べている (120)。近親相姦は通常倫理に背く犯罪（毒）であるが、その共感の純度は高く、理想的愛の結晶（賜物）ともなり得る。つまり、Laon と Cythna の愛の達成には毒を通り抜けなければならないのである。この実りと毒は、革命の理念を後世に伝えるには革命家の殉死が伴われるという本作品のシナリオにもつながっていく。Cythna が予言したように、人類愛（春）の到来に先んじて世界は彼らの殉死（冬）を経験しなければならない。物語の結末で革命に殉死した後、ようやく Laon はよみがえって Cythna の子どもとともに結ばれて、家庭愛を構築することができる。このように、愛の実りには毒が伴われるのである。

3. Pestilence と Laon の遭遇

このように、Laon は愛を知り獲得するために毒を経験しなければならない。この論理は、Laon が狂気の母 Pestilence に遭遇にも対応する。Laon は Cythna との結婚後、Cythna の空腹を見かねて食べ物を探しにでかける。そこで狂気の母 Pestilence に遭遇する。Pestilence は二人の子どもを失い Laon を含めた他者に対して攻撃的態度を取る。だが、Laon は Cythna への愛を心に思うことで絶望に飲み込まれまいとする。この点で、Laon は Cythna との再会を通して強く成長しているが、Laon は Pestilence の絶望を救うことはできない。Laon は Pestilence の絶望に心を痛め慰めの言葉をうわ言のようにつぶやくが、その言葉には真の共感がこもっていない。

[..]and but that she

Who loved me, did with absent looks defeat

Despair, I might have raved in sympathy;

But now I took the food that woman offered me; (6. 52. 2799-802)

Laon の言動には絶望に浸り攻撃的になった Pestilence への恐怖心や自らもその絶望感に飲み込まれるのではないかという不安感すら垣間見られる。言い換えれば、Laon は、子どもを失った母親の気持ちに完全に共感できず、Pestilence を救うこともできない。幼少の頃の Laon は言葉を巧みに操ることができ、「言葉を武器として引き出すことができた (drew / Words which were weapons)」(2. 20. 841-42)。特に、Laon は Cythna と別れてからは言葉を「真実の剣 (a sword of truth)」として革命を起こそうとする (4. 10. 1501)。しかし、その革命は失敗し、Pestilence の前に、Laon は言葉の完全な挫折（革命の挫折）を知るのである。最終的に Laon は Pestilence を連れてもどることを説得できず、反対に Pestilence から食べ物を受け取り、これを Cythna のもたに持って帰ることになる。Laon は Cythna の愛のために、Pestilence の絶望を救うことをあきらめて食料を持ち帰ったのである。Laon は Pestilence を犠牲にして、持ち帰った食料を Cythna に与える。つまり、Laon は Cythna への愛を優先するために、Pestilence をやむなく見捨てたことになる。愛の達成のために、Laon は毒を実践したのである。

だが、この場面における Pestilence の役割はもう一つある。確かに、Laon と Cythna の愛は家庭愛に満ちて、Pestilence の退廃した家とは対照をなす。また、Pestilence は子どもを失ってから「もはや母親ではなくなった (I have no longer been a mother)」と Laon に告げ、母の愛情を完全に失ったかのようである (6. 49. 2771)。だが、Lao が食料をさがしていると言うと、Pestilence はパンを投げつける。狂気に満ちて乱暴ではあるが、Pestilence は Laon に食べ物を供給しているのである。

She leaped upon a pile, and lifted high
Her mad looks to lightening, and cried: "Eat!
Share the great feast—to-morrow we must die!"
And then she spurned the loaves with her pale feet,

Towards her bloodless guests; [...](6. 52. 2794-98)

Pestilence は狂気に陥ってもなお、母の愛をわずかながら持ちこたえているとは考えられないか。つまり、Pestilence が子どもに与えられない乳を、代わりに Laon にパンを与える行為で補っているとは考えることもできる。つまり、Pestilence もまた授乳する母のモチーフを踏襲していることになる。同時に、Laon は Pestilence を前に子どもに戻り、愛を到達するには毒を経験しなければならないことを知るようになる。Pestilence から受け取ったパンで、Laon と Cythna は「平和に満ちた食事を共有する (share / Our peaceful meal)」(6. 55. 2822-23)。Laon と Cythna の食卓には静かな愛と家庭的平穏さが存在し、Pestilence が Laon にパンを与える姿とは対照をなす。それと同時に、Pestilence の絶望を受けて二人の姿はどこか寂しげではある。Laon は Pestilence との遭遇を通して、母親の悲しい愛を学び自らの愛を守ることになる。Pestilence との遭遇の後、Laon は Cythna に子どもを失う苦しみとその苦しみから立ち直った経緯を教えてもらうことになる。Cythna の経験は Pestilence の陥った絶望と他者への暴力性とは対照的に描かれる。なぜなら、Cythna の声は非暴力を体現し、Cythna の物語は愛の強さを表しているからである。

4. Cythna のこどもと Laon の関係

Cythna の子どもは物語の順番から見て、生物学的父親は暴君である。なぜなら Laon と結ばれる以前に、Cythna は暴君にレイプされ子どもを生んでいるからである。一方で、先行研究が解釈しているように、子どもは Laon と Cythna の精神的結びつきから生まれている。⁴ Laon と Cythna の結婚を描写する場面と子どもが Laon を父親として認める場面には共通して「彗星 (The Meteor / The meteor / the sunken meteor)」が登場するのは示唆的である (6. 33. 2623, 2632, 12. 21. 4638)。また、Laon と Cythna の結婚を描写する際に用

いられるナイル川の比喩には子どもを育てる表現が強調されている。このふたつの比喩やモチーフは、Cythna の子どもが Laon の子どもになることを予示している。これを裏付けるかのように、第5巻で Laon と子どもが最初に遭遇した際に Laon が子どもの額に「父親のような (as [...] a father's kiss) キス」をしている (5. 24. 1934)。これを受けて最終巻で、Cythna の子どもはあの時 Laon に自分が Laon の子どもだと感じたと明かすのである。

Then the bright child, the plumed Seraph came,
And fixed its blue and beaming eyes on mine,
And said, "I was disturbed by tremulous shame
When once we met, yet knew that I was thine
From the same hour in which thy lips divine
Kindled a clinging dream within my brain,
Which ever waked when I might sleep, to twine
Thine image with *her* memory dear—again
We meet; exempted from mortal fear or pain. (12. 24. 4657-65)

興味深いことに、この Laon の行為に対応して Cythna の子どもは暴君に殺されるまで暴君の子どもとして描かれている。死んだ子どもが天使として蘇ったときに初めて Laon が父親となるのである。確かに、子どもの生物的父亲は暴君だが、性質は Laon に近い。第5歌においてかりそめに成功を収めた革命の旗印の下、Laon と革命の仲間は暴君の館へ向かい、そこで子どもと遭遇する。このとき、暴君と子どもは空腹のまま軟禁されている。なぜか、暴君は先に子どもの空腹を気遣い、子どもに食べ物を与えるように Laon たちに言う。

At last the tyrant cried, "She hungers, slave,
Stab her; or give her bread!" —It was a tone

Such as sick fancies in a new-made grave
Might hear. I trembled, for the truth was known,
He with this child had thus been left alone,
And neither had gone forth for food [...] (5. 27. 1954-59)

だが、持ってこられた食べ物を子どもはまず先に暴君に与えようとする。

[...] I sate beside him
Upon the earth, and took that child so fair
From his weak arms [...]
[...] when food was brought to them, her share
To his averted lips the child did bear,
But, when she saw he had enough, she ate
And wept the while; [...] (5. 30. 1981-87)

本作品において一貫して食べ物を与える母親のイメージが愛を表しているのだとすると、子どもの行為は愛を表す。Laon と Cythna は近親相姦の関係であり、社会の因習からすると悪だが、この二人の精神的交流から善が生まれうるのである。また、Laon は他者の子どもを受け入れることで、Laon は自らの男性性を抑圧し、忍耐、希望、勇気を学んで、成長と発展を果すことになる。つまり、青年時代の Laon が Cythna に対して暴力的性欲を抱いた経歴、毒の部分解消するのである。

Laon が Cythna の子どもにキスをしたとき、子どもの額・脳には夢が「着火され (Kindled)」て、子どもにとって Laon が父親であるとひらめいたと言う (12. 24. 4662)。額 (精神) に夢が火 (光) として植えつけられるのは、詩的インスピレーションの啓示を表す。つまり、Laon が Pestilance に対して言葉の挫折を経験したのに対して、子どもとの関係を構築することで、詩的イン

スピレーション（言葉）の復活を遂げる。本作品の献辞詩 To Mary においても、話し手はメアリと子どもで構成される家庭的平穏が詩的インスピレーションをもたらすと主張している。

And from thy side two gentle babes are born
To fill our home with smiles, and thus are we
Most fortunate beneath life's beaming morn;
And these delights, and thou, have been to me
The parents of the Songs I consecrate to thee. (9. 77-81)

同様に Laon の言葉の力は革命とともに一端挫折するが、子どもに導かれて復活することになる。このとき子どもは人々に変化を感じ取り、千年王国の樹立を予告する。つまり、子どもを通して真の人類愛を獲得した Laon は詩的創造力を発揮して自らの物語を語り、民衆の変化と千年王国の樹立を語ることができるのである。

注

¹ 本作品の中で Laon が真の人類愛を認知する過程の中で、Cythna の果たす役割は決して小さくはなく、先行研究においてフェミニズムやジェンダーの観点から Cythna の役割は論じられてきた。Cythna が Laon と対等の関係か、副次的かで批評家の意見は分かれているが、Shelley は現実の女性像を Cythna の中に描いるわけではなく、Cythna 像がフェミニズムの表明として成功しているとはいえない。Chichester⁸⁶など参照。また、作品の構造上、Cythna の物語は Laon の語りの中に組み込まれており、Cythna が Laon に精神的成長を促すガイド的役割を果たしていると考えるのが妥当である。Richardson⁷⁴⁹など参照。

² 詩の行数は献辞詩からの通し番号を採用するものとする。

³ See Richardson 744.

⁴ E.g. Sperry 47.

参考文献

- Chichester, Teddi Lynn. "Shelley's Imaginative Transsexualism in *Laon and Cythna*" *Keats-Shelley Journal* 45 (1996): 77-101.
- Dawson, P.M.S. *The Unacknowledged Legislator: Shelley and Politics*. Oxford: Clarendon P, 1980.
- Richardson, Alan. "The Dangers of Sympathy: Sibling Incest in English Romantic Poetry." *Studies in English Literature, 1500-1900* 25. 4 (1985): 737-54.
- Shelley, Percy Bysshe. *The Complete Poetry of Percy Bysshe Shelley*. Eds. Donald H. Reiman, Neil Fraistat and Nora Crook. Vol.3. Baltimore: Johns Hopkins UP. 2012.
- . "On Love." *Shelley's Poetry and Prose: Authoritative Texts Criticism*. Eds. Donald H. Reiman and Neil Fraistat. NY: Norton, 2002.
- Sperry, Stuart M. "The Sexual Theme in Shelley's *The Revolt of Islam*." *Journal of English and Germanic Philology*, 92 (1983): 32-49.